



鈴木真衣さん

三姉妹の真ん中。小さいときは甘えっ子などころもあったが、妹ができて面倒見の良いお姉さんになった。「保育士になるにはどうすればいいの?」とよく聞かれた。4年生からはミニバスケットボールを始めた。典行さんも同じ時期にコーチに。3年間、父子一緒に成長した。

(写真は鈴木典行さん提供)

津波をまぬがれた石巻市大川地区の自宅。勉強机の引き出しに、丸っこく丁寧な字で書かれた1通の手紙が残されていた。市立大川小学校で亡くなつた6年生の真衣さんが、命を落とす

「大川小はどうなつてますか? これからも体に気をつけて、早死にしないよ。このクラスの人の人生きはどうなつているかねえ。これからも過去を大事にしてね。12歳の真衣よ何かを悟つたかのような

## 大川小 津波訴訟

### 連載第1部「家族の足跡」②

文面に「どきつとした」と、次女を突然失つた鈴木

2日前に書いた手紙だつた。宛先は「20歳の真衣へ」。

典行さん(51)は言う。あの年の春に大川小に入学する予定たつた三女玲さん(12)は今年、別の学校の6年生になつた。ふとしたときの横顔が、電話越しの声が、似ている。次の3月1日、お姉ちゃんを追い越す末っ子を見て、どんな気持ちになるんだろう。

# 「最後知りたい」同じ思い

19家庭が起した裁判には加わらなかつた。なぜかと聞かれても、はつきりとした答えはない。2014年2月に受け取つた第三者検証委員会の報告書。自分たちが調べた以上の新事実はなかつた。それでも、

「まだ自分でできる」と、市教委と話せることがある。原告になつた家族と、な

らなかつた家族。わかれてしまつたが、我が子の最後を知りたいという思いは、何も変わらない。



大川小へ献花に訪れたキャロライン・ケネディ駐日米大使を迎える鈴木典行さん(右から2人目)=9月、石巻市釜谷

娘が残した「過去を大事に」という言葉。いつか、そこに込められた意味がわかるときがくるだろうか

震災後、校舎や慰霊碑を掃除しているとき、見学に来た人に声をかけて、ここで何があったのかを語つてくれた。裁判が始まつてからも、原告の遺族も加わった「小さな命の意味を考える会」で、校舎の保存活動に取り組んだ。震災遺構として残ることになり、教訓をどう伝えていくか話し合つたため、この夏、市が立ち上げた会議のメンバーにもなつた。

遺族だけではいままだ「語る」ことしかできない。これからは、ほかの住民や行政も加わり、教訓を残す方法を考える。5年経つてやつと、一緒に歩み始めることができた気がする。